

連携強化へHEA I O Σ刷新

日積サーベイ



水嶋副部長

—今後の方向性は

来春リリース予定の『HEA I O Σ2021』ではさらなる

改良を行う予定である。鉄骨についても、ごとし実現した軸組配置機能をベースにプレースの垂直配置を実装するなど鉄骨積算の連携強化を継続する。

連携精度を左右する要素は大きく2種類に分類される。1つは壁などのオブジェクト、もう1つは材料名称であり、来春のバージョンではごとし実装した材料マスターをブラッシュアップしてExcelへの入出力機能、単価連動機能などの改良を行い材料連携の精度向上に注力

すると同時に、国土交通省の建築BIM推進会議において策定予定の標準分類体系の動向にも注視して実装の検討を進める。

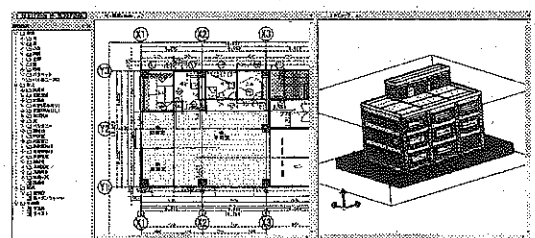
—BIM元年から10年が経過した

当社も連携機能の提供に向けた研究・開発を進めており、11年からBIM連携機能を提供している。毎年の改良により設計から積算、あるいは施工までの連携を実現可能にしたが、これまでを振り返ると、ユーザーの業務範囲の問題や設計・積算などの専門性の高い複数のソフトウェアをある程度理解する必要があった。今後はユーザーのスキルによって連携精度が左右される内容を極力排除し、設計者でも容易に使えることを念頭においたシステムづくりも検討している。

3次元CADを扱う設計者にとってプロ仕様の数量積算専用システムは非常に敷居が高く難易度も高いだけに、今後は設計者が容易にコスト算出できるシステムづくりを進める。当社はBIM連携積算に全力で取り組み、今後も連携精度向上のためのシステム開発を進め、積算システムにおけるBIM連携のパイオニアとして、建築生産の向上に寄与していきたい。

—最新版の特徴は

毎年のバージョンアップ時にBIMの連携精度を高めるため改良を施してきたが、最新版ではBIM連携のさらなる進化を見据え、ソフトウェアのコア部分を含めて全面刷新した。連携精度にハードルが高かった外装、鉄骨、雑ものなどを強化し、連携に必要なデータをシステム内に取り込めるようにした。壁・間仕切も3次元CADと同様のデータ形式を実現。これによりシームレスな受け渡しが可能となり、連携精度の向上と併せて運用時間の短縮を実現した。



最新版は下図機能など40項目の新機能を搭載した